



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	ノンフィクションからフィクションへと読書活動を展開する試み：読書教育方法論に関する基礎的研究
Author(s)	安, 直哉
Citation	[岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学] vol.[67] no.[1] p.[1]-[10]
Issue Date	2018
Rights	
Version	岐阜大学教育学部国語教育
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/77311

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

ノンフィクションからフィクションへと読書活動を展開する試み

——読書教育方法論に関する基礎的研究——

An Essay on Reading from Nonfiction to Fiction

安 直哉

YASU Naoya

1 本稿の提案

2017年（平成29年）3月に告示された小学校・中学校学習指導要領国語科において、「読書」は〔知識及び技能〕内の「我が国の言語文化に関する事項」中の一事項として取り上げられている。また、小説を読むことについては、中学校学習指導要領国語科の〔思考力、判断力、表現力等〕中の〔C 読むこと〕の言語活動例「イ」に明記されている。

しかし、中学生において小説が盛んに読まれている状況にはなっていない。様々な理由があるが、その一つに、小説は虚構だから読んでも有用性がないという考えがある。そうした考えを明解に論述している文章があったので、以下に掲載する。インターネット上のあるブログからの引用である。

実は私は小説については20年近く、読んだ事はありません。その代わりとして、ドキュメンタリー、ルポタージュなどの本は多数読んでいるのですが、なぜ小説を読まない、むしろ、読めないのか、その理由を書いてみたいと思います。

小説とは、誰かが作った世界の中に自分が没頭し、そして、そこでの感情移入や物語の中に自分を置く事です。

もはやその行為自体が私の感覚の中で受け入れられない行為とってしまうのです。それは小説でいくら面白くても、それは小説の作者が作った虚構の世界の中をさまよっていることに他ならないのですから。

何か、それが「負けた」、という気になるのです。

それは負け惜しみの感情かもしれませんが、誰かの作ったフィクションの世界の中で生じる「面白い」出来事よりも、現実の世界で起きている事件のほうが、事実としてはるかに面白い、とってしまうのです。

実際、先のアメリカ大統領選挙において、一体だれがトランプ氏が当選すると思ったのでしょうか。

とはいえ、小説の中で行われている「虚構の世界」に納得し、そこを楽しむことができるのであれば、それはそれで楽しいと思うのですが。<http://tmp-log.info/novel-reading-fact/> 2017年12月24日閲覧。）

小説家の創作した「虚構の世界」には没入できないというのである。万人に対して「虚構の世界」に没入せよ、と強要することはできない。しかし、中学校学習指導要領国語科の「言語活動例」で小説を読むことが明記されている以上、「虚構の世界」に誘う方法論を考案することも必要であろう。

本稿の提案の概略は以下の通りである。まず、現実に関わった未解決事件を扱ったルポタージュ（ノンフィクション）を読む。しかし、未解決事件であるから、当然ながら犯人や動機は解明されていない。そのように、情報に「穴」（空白）があると、人間は不安になる。そして、その穴（空白）を埋めたいと願望する。埋めるための情報はたとえ嘘（虚構）であっても、そこで展開される「虚構の世界」に納得するならば、安堵感やカタルシスが得られるのである。こうした過程を千野帽子は以下のように分かりやすく説いている。

嘘でもいいから説明がほしい

因果関係が明示されると、なぜ物語として滑らかな感じがするのでしょうか？

それは、できごとが「わかる」気がするからです。どうやら僕たちは、できごとの因果関係を「わかりたい」らしいのです。（中略）

人間とは、世のなかのできごとの原因や他人の言動の理由がわからないと、落ち着かない生きもののようです。（千野（2017）p. 53）

「嘘でもいいから説明がほしい」という願望に応じてくれるのが、未解決事件を題材にした小説（フィクション）である。つまり、ある未解決事件を扱ったルポルタージュ（ノンフィクション）の読書を導入にして、そこからその未解決事件を題材とした小説（フィクション）の読書へと展開するというのが、本稿の提案である。

指導にあたっての技術上の議論は割愛する。それに代えて、典型的な例として本稿では、「三億円事件」を題材として取り上げて、現実と虚構という観点を中心に読解・吟味していく。

三億円事件とは、1968（昭和43）年12月10日に東京都府中市で発生した、偽白バイ警官による、約三億円の現金強奪事件である。東芝府中工場従業員に渡されるボーナスを積んだ、日本信託銀行国分寺支店の現金輸送車が、車もろとも奪取された。

なお、三億円事件を扱った作品は多数であるとともに多岐に渡る。どの作品も多かれ少なかれ報道されたり関係者から伝聞した事実（現実）と、作家の想像（虚構）とが入り混じっている。そのため内容上から区分するのは難しい。本稿では表現形式を基に区分する。つまり基本的には、ルポルタージュ形式の作品をノンフィクションとして括り、一方、小説形式の作品をフィクションとして括った。

2 ノンフィクションとしての三億円事件

2-1 新聞記者が追った七年間——読売新聞社会部編（1975）『大捜査・3億円事件』——

三億円事件捜査の概要を知るには、管見の限り本書が最も適している。三億円事件の時効が成立した1975（昭和50）年12月10日の10日後に発刊されている。7年間の捜査を、4ページずつのトピックでほぼ時間軸に沿って列記している。このため、捜査がどのように進展していったか分かりやすくなっている。「努めて、事実だけを真っ正面から見詰めるように心掛けた」（読売新聞社会部（1975）p.3）という編集方針のもと、記者（執筆者）の主観は極力排除して、捜査に関する事実のみを記述するという姿勢を貫いている。そのため、極めて客観的で手堅いルポルタージュに仕上がっている。

本書から読み取れるのは、最大時200人近い捜査員と関係諸機関職員の、気の遠くなるような膨大な証拠調べである。そこに描かれているのは、華麗な推理捜査などとはほど遠い、足と手と目を使った風潰し的証拠固めの連続である。

客観的な記述を心掛けているとはいうものの、記者（執筆者）の本音も随所に垣間見える。記者（執筆者）は言う。「犯人の投げかけたナゾには、どうにでも解釈できる要素が多過ぎたのである。」（読売新聞社会部（1975）p.159）犯人がどこまで意図的に攪乱を図ったかは不明であるが、結果的に捜査の方針を幾度もブレさせることとなる。

巻末に、担当記者の座談会が掲載されている。記者Bの次の発言が心に残る。

“バランスのとれた思考力”の持ち主なら、白バイの警官になりすまして大金を奪うという計画、それが完全にできるなどと考えるだろうか。（読売新聞社会部（1975）p.277）

戦後最大の強奪事件などと祭り上げられたが、単に幾重にもことごとく悪運が連なっただけの一犯罪だったのかもしれない。

この7年間の記録を読むと、捜査陣が最も高揚し、そして落胆したのは、事件発生の翌年12月のK青年の誤認逮捕である。これで完全に捜査陣に対する世間の風向きが変わった。

釈放されたK青年の後日について、読売新聞社会部は次のように書いている。

事件から七年、逮捕騒ぎの悪夢から六年が過ぎ、事件が時効の年を迎えた五十年——K青年は強じんな精神力でみごとに“自立の道”を切り開いた。東京の公立機関に職を得て、平和な家庭を築いている。三人の父親となった。（読売新聞社会部（1975）p.242）

しかし、このまとめ方は、どうも楽観的すぎるようだ。ノンフィクション作家の祝康成（別名 永瀬隼介）は、K青年のその後を追っている。釈放後も、世間とマスコミは彼に好奇の眼差しを浴びせ続ける。K青年は結婚するも「仕事はなく、夫婦で廃品回収業に従事し、リヤカーを引いたこともあった。ところが行く先々でリヤカーの中をのぞき込まれ、「ここに3億円があるのか」などと嫌がらせを言われたため、2カ月余りで辞めている。

／その後もタクシー運転手、看護師助手など、職を転々とするが、いずれも長くは続かなかった。」(祝(2001) p.55) については「強度のノイローゼになって自宅に籠り、子供の外出も禁止していた時期があった。」(祝(2001) p.56) 「子供をこれ以上騒動に巻き込みたくない」(祝(2001) p.56) という理由から離婚する。離婚後もマスコミに抗議を続けていた元妻は46歳で倒れ、亡くなっている。K青年は1976(昭和51)年に「公立高校用務員の職を得、離婚後は1人家を出て借家を転々としていた。」(祝(2001) p.57) その後57歳になった頃「公立高校用務員の職を辞し、平成12年11月「関西方面へ行く」と言ったまま自宅を出て行方知れずである。」(祝(2001) p.59) というのがK青年のその後である。K青年こそ3億円事件で人生を大きく崩された最大の被害者だった。

以上のように論究の不足はあるものの、総合的には『大捜査・三億円事件』は、三億円事件およびその捜査の全体像を把握するのに最も適した書籍となっている。翻って言うならば、この三億円事件は、その社会的影響・波紋があまりにも大きいため、一冊の本で総括するのは不可能に近いということになる。

2-2 捜査主任・平塚八兵衛の捜査記録——平塚八兵衛著(1975)『三億円強奪事件』——

平塚八兵衛は、帝銀事件、吉展ちゃん事件、下山事件などを手掛けた名刑事である。平塚は三億円事件発生の四か月後に捜査本部に招聘された。

平塚が本書を上梓した理由は、一貫して三億円事件の犯人の検挙にある。時効が成立する三か月前に本書は出版された。最後のこの時期に世間の耳目を再度集めようと試みたのである。本書のカバーには世論を喚起するため次のような文句が書かれている。

あなたは犯人を知っている！！ 私は32年間の捜査一課の生活の中で、124件の事件を扱って来た。そのどれをみても、周囲の人が全く知らなかったという事はない。なんらかの形で犯人を知っていた。この事件も絶対周囲が知っている。もう一度あなたのまわりを注意してみてください。(平塚(1975)裏表紙カバー)

平塚は事件発生から四か月間の捜査の問題点を洗い出し、自らの手で再捜査を行った。平塚が強く批判したのが、偽白バイ警官のモンタージュ写真である。現金を運んでいた日本信託銀行の行員の証言を元に作られたが、それらの証言がまったくあやふやな記憶によるものであったことを聞き出している。モンタージュ写真のみが独り歩きをして、犯人像をミスリードしてしまったことを悔いている。

平塚は単独犯説を主張した。平塚の強力な主張によって、平塚加入後の捜査本部は、単独犯説を基本に据えるようになった。はたして平塚の唱える単独犯説が、捜査を正しい方向に導いたかどうかについては、犯人検挙がなされていない以上、その評価を下せない。

また、それまで想定されていた犯人の年齢が18～25歳位となっていたものを平塚は修正し、犯行時30歳位と見立てた。

いずれにせよ、平塚を含めた捜査本部は、137,810人を対象者として調べ上げた。これだけ膨大な対象者を調べてもなお、犯人は検挙できなかった。まさに不可解な事件である。

2-3 焼け残った五百円札——一橋文哉著(1999)『三億円事件』——

一橋文哉は、「ヨシダ」という人物から五百円札の写真のコピーを見せられる。その紙幣番号は、三億円事件において警察が発表した強奪された五百円新札の番号の一つと一致していた。これを契機に一橋は三億円事件の調査を始める。

一橋は、「先生」と「ジョー」と「ロク」という三人組の犯行と結論づけている。「ロク」が白バイ警官に扮し、「ジョー」が逃走用のカローラを走らせる。「先生」は遠方から全体の計画立案・指揮をするという役割だ。

ロサンゼルスにて「先生」にインタビューで迫るのが本書後半の山場である。結局、先生から自白は得られなかった。また、実行犯の「ジョー」を追ってメキシコへも入国するが、「ジョー」を探し出すことはできずに終わる。動機は、「先生」に蓄積されていた三菱銀行と警察への恨みだとしている。(現金輸送車は3か月前まで

は、日本信託銀行国分寺支店ではなく、通りを挟んだ向かい側に建つ三菱銀行国分寺支店から出発していた。)。

「先生」と「ジョー」と「ロク」という年代の違う三人を結び付けたところが本書の肝となっている。

三億円事件関連のノンフィクションとしては、最も広く読まれた書籍である。本書後半の、氏独自の海外取材の内容については、フィクションではないかとの批判も多い。しかし、警察のような公権力を持たない作家においては、どのような調査報告を世に問うても、そこに虚実の線引きはできなくなる。この虚実の線引きの曖昧さを含有する点において、ノンフィクション作品は、フィクション作品との峻別が図られる(フィクション作品は元より虚構である)。

2-4 帝銀事件の影——松田末雄著(2012)『三億円事件の真実』——

松田末雄は、多くの証言や状況証拠をもとに、想像を逞しくして、犯人のアジトは埼玉県にあり、電車で三多摩地区に通って、事件の準備を周到に行い、実行したと論じている。

また、「現金輸送車三億円強奪を実行した犯人は、帝銀事件に深く関係していた人物の犯行と、僕は見ている。」(松田(2012) p.107)と主張する。帝銀事件が発生する前に、同様の手口で三菱銀行が狙われた。しかし、未遂に終わった三菱銀行は、その未遂事件について公表しなかった。もし三菱銀行が犯行の手口を公表していたら、帝銀事件は未然に防げたのだ。帝銀事件被害の関係者には、三菱銀行への遺恨が渦巻いていた。その遺恨を強く抱いた一人が三億円事件を起こしたという推理である。

この推理の妥当性についてはいささか疑問を抱くが、むしろ興味深いことは、犯罪史に因果関係という理由づけを求めたいという、〈物語形成願望〉が生きて働いている点である。三億円事件はあまりにも不可解な事件である。不可解な事件に直面した場合、人々はそこに何らかの意味づけをして、納得感を得たくなる。三億円事件についても、帝銀事件を始めとする日本の昭和犯罪史の中に因果関係を以て組み込み、日本犯罪物語の一角を形成する事件に仕立て上げることで始めて、了解が得られるのである。そうした人々の心性を満たす役割を本書は担っている。

2-5 俯瞰図の臨場感——むらきけい著(2005)『真相究明ガイドブック 雨の追憶 図説 三億円事件』——

平成29年3月告示の中学校学習指導要領国語科の第2学年〔思考力、判断力、表現力等〕「C 読むこと」(1)のウには、「文章と図表などを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈すること。」を唱えられている。このように、近年は図表を読みこなす能力も国語科で求められるようになった。俯瞰図という表現技法から三億円事件を描いた秀作が本書である。

事件の発生から時効成立までの7年間の捜査の経緯を、全ページにわたり俯瞰図を用いて表現している。その効果は抜群で、臨場感をもってトピックを認識できる。特に地理的位置関係については、文章表現の限界を圧倒的に凌駕するものとなっている。ノンフィクションの新たな表現形式を開拓したという点で、本書は高く評価されるであろう。

3 フィクションとしての三億円事件

三億円事件を題材とした小説は数多いが、本稿ではそのうちの代表的なものを、単行本の出版年順に紹介・考察していく。

3-1 犯行の系図——佐野洋著(1970)『小説 三億円事件』——

佐野洋著『小説 三億円事件』は、三億円事件発生後の2年後に講談社から単行本として出版されている。時効よりも5年前に上梓されているところに本書の特色がある。

本書は、「系図・三億円事件」「三億円犯人会見記」「三億円犯人の情婦」「三億円犯人の挑戦」「三億円犯人の秘密」の五つの短編小説から成っている。このうちの「三億円犯人会見記」「三億円犯人の情婦」「三億円犯人の挑戦」の三編は、三億円強奪事件とは関係していない。主人公が、身近に起きた非日常を勝手に三億円事件と関

連付けて解釈し、それがために隘路の陥っていく物語である。

三億円事件について、佐野は小説内で次のように評している。

手口の奇抜さを上げる人もいるだろう。盗難金額が、桁違いに大きいことも、原因の一つと見られよう。

さらに、個人の被害者がいない、血が流されていない、など、一般の犯罪にくらべ、暗さが少ないことが、親しみやすい感じを与えるのかもしれない。(佐野 (1970) p.176)

陰湿や醜態のない、カラッとした親しみやすさというのが、当時の庶民の三億円事件に対する皮膚感覚だった。そのうえで、推理作家である佐野はこの事件に関わるいくつかの疑問に一計を案じたのである。

その一つ、「手口の奇抜さ」について、小編「系図・三億円事件」で面白い創作を加えている。

1944 (昭和 19) 年に、愛知県 T 市の海軍工廠に給料を運んでいた S 銀行 T 支店の乗用車が、サイドカーに乗った二人の憲兵に停止を命じられる。この乗用車に時限爆弾が仕掛けられているから、と乗員は下車させられた。そして乗用車ごと憲兵 (の制服を着た犯人たち) に強奪された。乗用車には S 銀行 T 支店の行員二人が乗っていたが、そのうちの一人が香沼晴正だった。戦中や偽憲兵の事件ということもあって、この事件は公にされなかった。しかし、香沼晴正から内々に事件の手口を聞いた、弟の香沼晴昭が、戦後、似たような手口の事件に加担した。1951 (昭和 26) 年、兵庫県 H 市で、D 銀行 H 支店から、市内の造船所職員分の給料を運んでいた自動車が、車もろとも強奪された。MP のジープによって停止が命じられた。自動車に時限爆弾が仕掛けられていると言われ、車から降ろされたのである。その MP に付き添っていた通訳が当時 O 医専の学生だった香沼晴昭だった。

その後、美容整形医になった香沼晴昭は、愛人の義弟に今回の三億円事件の実行を促したのである。(以上、「系図・三億円事件」の要約。)

1 回目は憲兵、2 回目は MP、そして 3 回目は白バイ警官と、いずれもその時代の庶民にとって絶対的な権力を持っていた職種に偽装したという点が事件遂行の鍵であった。佐野洋は「手口の奇抜さ」という世間一般の感覚を逆手にとって、創作を展開した。同様の手口が戦中、戦後と繰り返され、一組の兄弟が三件の事件の継承役になっているという発想である。こうした意外な切り口こそが小説 (フィクション) の醍醐味であろう。

3-2 政治家へのリベート——豊田行二著 (1972)『消えた三億円』——

1968 (昭和 43) 年 12 月 10 日午前 9 時 20 分頃「日本信用銀行国分寺支店」(架空の銀行) から「芝西電気府中工場」(架空の会社) へ運ばれていた芝西府中従業員のボーナス三億円が、白バイ警官を装っていた犯人に乗用車ごと強奪された。

ルポライターの鎌田竜介は、芝西電気から防衛庁関係の政治家にリベートが流れたと推察した。芝西電気が、三億円事件発生の 3 か月後の 1969 (昭和 44) 年 3 月に防衛庁と誘導武器システム 95 億 6 千万円の契約を締結しており、その結果 1968 (昭和 43) 年度の芝西電気の防衛庁への契約総額は 120 億円で業界三位に躍進した。業界筋ではリベートは総額の 2.5 パーセントが相場と言われ、その金額はまさに 3 億円になる。

鎌田の推理では、芝西電気がこの事件の主導者であり、それに日本信用銀行、さらには警察庁や防衛庁といった旧内務省に由来する省庁から天下りした元官僚が一役買った、組織ぐるみの犯罪となる。

こうした推理を実証するために鎌田は奔走するが、事実近づくにつれ、記事を書かせまいという脅迫を受ける。当初連載を約束していた週刊誌も掲載を拒むようになった。そのようななか、次期総裁選を戦う政治家・金川十郎の第二秘書で、大学の同級生だった奈良岡哲夫から、この記事の自費出版の援助の提案を受ける。自費出版でも世に問おうと鎌田は一度は了承する。しかしその自費出版の実態は、一般図書ではなく怪文書の類であることを知る。3 億円のリベートは、金川十郎と総裁選を争っている奥村峯夫の派閥に流れた。この事実を怪文書として流すことによって、総裁選において奥村峯夫を失脚させ、金川十郎有利の政局を作ろうと奈良岡は目論んでいたのである。このことを知り、鎌田は今回調べ上げた三億円事件の記事をすべて破棄したのだった。

(以上、豊田 (1972) の要約。)

被害企業・被害銀行が、実は元官僚も動員して事件を立案・実行した。そして、盗難された現金が政治家に渡

ることで、被害企業は、拡大する防衛産業を担う防衛企業としての足固めに成功した。被害者が実は加害者であったという顛末は小説としては陳腐かもしれない。しかし、金権政治や、政治家と大企業の癒着といった、昭和の政治腐敗と三億円事件とを結び付けたところなどは、本小説の面目躍如と言えよう。

3-3 フィクションの魅力と底力——中島河太郎編(1975)『小説推理 三億円事件』——

三億円事件が時効を迎えるにあたって、当代の人気推理作家たちが著した三億円事件関連小説六編を収めたのが本書である。本稿ではそのうちの一編、生島治郎著「三億円は死んだ」を紹介する。

売れない翻訳家・倉西誠一が主人公である。異母の弟である倉西藤夫と二人で三億円事件を実行した。頭脳派の誠一が全体の計画から多磨農協への脅迫文執筆等を実施し、肉体派の藤夫が偽白バイ警官役を務めた。

犯行は成功し、現金三億円は誠一が隠し持っている。しかし、誠一の真の狙いは金銭を得ることよりも、時効後に『三億円事件の真相』という図書を出版して、作家としての名声を世に知らしめることにあった。すでに同書原稿は完成し、現金三億円と一緒に誠一宅の地下深くの秘密の洞穴に貯蔵されていた。

強奪した現金を無心する藤夫を邪魔に思う誠一は、言葉巧みに誘導し、二人で香港・マカオに渡航し、偽名で当地のホテルにチェックインする。マカオのカジノで資金洗浄を図るといのが誠一の藤夫への口実であった。しかし、真の狙いは当地のギャングを雇い、藤夫の殺害依頼をすることになった。雇ったギャングは依頼通り藤夫を殺害するが、返す刀で依頼主の口も封じるべく誠一も殺されてしまう。現金三億円と倉西誠一の力作『三億円事件の真相』は、誠一宅の地下深くに永遠に眠ったままとなる。(以上、「三億円は死んだ」の要約。)

三億円事件の犯人グループ(異母兄弟)が誰にも知られることなく、この世から消えてしまっているという結末は、まことに儂いが、案外、そういうものなのかもしれないという錯覚さえも覚えてしまう。読者をこうした錯覚に引き込む磁場を、フィクションは持っている。フィクション(小説)が読み継がれてきた所以の一つであろう。このあたりに読書教育目標論を形成する手掛かりがありそうだ。

3-4 銀行への恨み——三好徹著(1976)『ふたりの真犯人 三億円の謎』——

重藤(新聞社社会部遊軍記者)を主人公として、その重藤によって捜査の経緯が追われ、さらに重藤によって推理、謎解きが語られる形式を取っている。重藤が語る犯人像は、弱電工事を職とする人物とその兄弟の二人組。1968(昭和43)年9月~10月に三多摩地区から神奈川県川崎市西部に転居していると推察する。犯行の動機は、日本信託銀行国分寺支店藤巻支店長にかつて融資を断られた。その恨みであると言う。

三好徹自身が本小説の文庫化にあたり、「本書の諸データは、いうまでもないことだが、現実のそれと完全に一致している。」(三好(1980) p.295)と記している通り、第1章から第4章および第6章から第7章までは事件発生後の捜査の経緯を事実忠実に描いている。その意味で、小説というフィクション形式をとりながらも、ノンフィクションの色合いの濃い作品となっている。本書の宣伝文句が「ノンフィクション・ノベルの傑作」(三好(1980)裏表紙カバー)となっていることから、本作品がノンフィクションとフィクションの中間に位置づけられることが分かる。第5章の「犯人像」によって、著者の推理が重藤によって語られる。

3-5 少年Sの肖像——松本清張著(1975)「小説 三億円事件「米国保険会社内調査報告書」」(松本清張(1978)『水の肌』所収)——

三億円事件発生の日後(12月12日)、19歳の少年Sが捜査線上に浮かびあがる。「立川グループ」という不良団体の幹部であった。捜査本部は少年Sの身辺調査を開始する。ところが警視庁内の横の連絡が取れていなかったため、立川署の刑事が12月15日に別件の逮捕状を携えて少年Sの自宅を訪問してしまう。少年Sの母親は当人の不在を強く主張した。少年Sの父親が現職の警察官だったこともあり、刑事は引き返してしまう。その日の深夜に少年Sは青酸カリによる服毒自殺をする(死亡推定時刻、12月15日午後11時前後)。

少年Sはクロに近い人物であったが、最終的にはシロと処理される。日本信託銀行国分寺支店長宛てに郵送された脅迫文の入った封筒の切手に残っていた唾液から、犯人の血液型はB型と確定していた。しかし少年S

の血液型はA型だった。また、多磨駐在所への爆破予告状が郵送された時期、少年Sは練馬の東京少年鑑別所に収容されていた。こうした事実から、少年Sは捜査線上から消えていく。

しかし、松本清張の小説では、この少年Sをモデルとした人物が犯人の一人とされている。単独犯ならば上記の証拠をもってシロと言えるが、松本は複数犯説を主張する。「この3億円事件の様相をみると、複数犯の臭いがぷんぷんとしている。」(松本(1978) p.153) 同小説では、単独犯説を主張した平塚八兵衛をモデルとした「老練な刑事」(松本(1978) p.142)の発想をことごとく批判している。

現実には、少年Sの父親は警察官である。しかし本小説においては、少年Sの義兄の伯父を警備会社の社長と創作している。ここから虚構としての松本小説の本領が発揮される。3億円の隠し場所は、その伯父が経営する警備会社の倉庫の奥深くであると結論づけられる。警備会社の倉庫の奥深くまでは警察の目も届かない。また、犯行のアジトを、立川米国空軍基地内であるとする。日本国内であるにもかかわらず治外法権的な米軍基地内であれば、捜査の手も充分には届かない。

しかし犯行の動機について松本は明確に示していない。結果論として、新規参入のため経営が厳しかった伯父の警備会社がその後持ち直した。そのための資金としてこの3億円が使われたと想像はできる。しかし、伯父が少年Sを使って積極的に犯行を企てたわけではない。少年S一味の犯行の動機は不明なまま小説は閉じられている。

3-6 退廃した男女の犯行——清水一行著(1979)『時効成立：全完結』——

自堕落な生活を送る西原房夫と、その同棲相手・孝子の二人によって、三億円事件は計画された。特別な動機やトリックはない。西原が実行犯の偽白バイ警官になり、強奪後は逃走用カローラに乗り換えてそのまま中央自動車道を走る。山梨県上野原近辺の墓地に行き、西原の遠縁の墓の中に三億円を隠した。一か月後に二つの大きなスーツケースに三億円を詰め込み、孝子が、信頼できる知人に中身を秘匿したまま預ける。その後、西原は愛人のマンション建設に乗じて三億円のうちの九千万円をつぎ込み、マンションの実質的管理人として高い定期収入を得、成功者として成り上がる。(以上、清水(1979)の要約。)

西原と、彼を取り巻く女性の怠惰な肉体的愛憎劇の中に三億円事件が組み込まれ、極めて人間臭い大衆性を帯びたストーリーとなっている。

3-7 父と子の葛藤——小林久三著(1981)『父と子の炎』——

当初、クロに近いと思われていたものの三億円事件の6日後に、青酸カリ服毒自殺によって捜査線上から逃走した少年Sをモデルとした小説である。少年Sは地元の不良集団「立川グループ」の幹部で、自動二輪の運転免許を所持しておりオートバイの運転技術に長けていた。少年Sの父親は「警視庁第八方面交通機動隊に属する現役の白バイ隊員」(別冊宝島編集部(2008) p.72)であった。

少年Sは、横溝一彦として形象化されている。厳格な父(白バイ警官)のもと育てられた一彦は、父に反発する。そして不良仲間の鄭昇一と三億円事件を計画する。事前の陽動作戦としての脅迫文投函を鄭が実行し、当日の偽白バイ警官役を一彦が実行した。

親子の衝突のなかで、父・横溝は、次第に息子が三億円事件の犯人であることに気づいていく。父の愛憎と息子の反発のうねりの中で6日間がすぎ、強制捜査が入る直前に至る。父は息子に青酸カリを渡し、息子はそれを飲んで服毒自殺を遂げる。(以上、小林(1981)の要約。)

峻烈な中にも息子への愛情を挟んでしまう父と、父に受け入れられない苦しみで反抗する息子の、両者の葛藤が、父の視点と息子の視点の両側から交互に書き連ねられていく。父の影響から抜け出せなかった弱い息子には、三億円事件という空前絶後の犯罪の後始末としては、自殺という道しか残っていなかった。

3-8 内部犯説——新都達也著(1987)『死者よ静かに眠れ：府中三億円強奪事件』——

三億円事件は複数犯によるもので、さらにその中には警察内部の者が含まれている。現在警視庁公安三課に

所属するその男によって、真犯人グループに辿り着こうとした刑事たちは次々に殺されていく。そこには警察組織を防衛するための上層部からの陰謀も垣間見える。(以上、新都(1987)の要約。)

警察組織の隠蔽・保身体質がどれほどのものなのかは、今でも分かりかねる。三億円強奪犯はストーリー展開上、狂言回しの役割に留められ、本小説の基調を為すテーマは警察組織の腐敗に向けられている。

3-9 初恋と偽白バイ警官——城真琴著(2000)『幻想の手記 褐色のブルース』——

幼くして父と死別し、母からも捨てられた女性主人公・城真琴の自伝として語られる作品である。高校1年生の時、真琴は、新宿のジャズ喫茶Bにたむろしていたグループの仲間となった。その中の一人、東大生の岸(岸本)に真琴は次第に惹かれていく。岸は、真琴に無免許ながら単車や自動車の運転技術を身に付けさせる環境を与えていた。二年半後には350ccのバイクまで乗りこなせるようになっていた。

岸は真琴に、現金輸送車強奪の計画を教え、府中の地理を覚えさせていく。そして1968(昭和43)年12月10日、高校3年生だった真琴は、女性声を男性声に変換できるマイクを身につけて、白バイ警官に扮装し、岸の計画通り現金輸送車を強奪した。

岸は大物政治家の息子だった。強奪した現金を父に送りつけることで父の支配からの脱却を図ったのである。

不遇で身内からも疎んじられていた少女・真琴は、岸によって初めて、求められる唯一無二の存在として認められた。

今では、ジャズ喫茶Bにたむろしていた皆は死亡してしまい、海外を放浪している岸の安否も分からない。

刑事事件として7年、民事事件として20年の時効が成立し、事件から30年もの年月を経たいまも、初恋がゆえの哀しみは忘れ去ることができない。(以上、城(2000)の要約。)

三億円事件がこのようなノスタルジックでロマンチックな青春物語として回想できるのは、やはり30年強という長い時間が為せる技なのであろう。突拍子もない設定と批判することは簡単であるが、学生運動が盛んであったあの時代の記憶というものは、三億円事件をも歴史の一齣に組み込んでしまうほどの感傷を喚起するようである。

なお本書は加筆・修正のうえ、中原みすず名義で2002(平成14)年に『初恋』という書名で上梓され、その後映画化もされた。

3-10 少年Sとその恋人——永瀬隼介著(2003)『閃光』——

三億円事件をモチーフにした本格長編小説である。

玉川上水で葛木勝の死体が上がった。定年間近の捜査一課刑事・滝口政利はその名前を聞くと、すぐ思い当たる事件があった。34年前に発生した3億円事件である。滝口は相棒の小金井中央署刑事課刑事・片桐慎次郎と捜査を進める。

3億円事件は、立川グループのリーダーの緒方純が実行役となり決行された。この緒方純は少年Sをモデルにした形象人物である。緒方純のヘッドのもと、吉岡健一、葛木勝、結城稔、金子彰という不良グループによって為された犯罪であったが、その背後には緒方純の恋人・真山恭子の存在があった。真山恭子の父親は警察庁のキャリアで当時、東北管区警察局長だった。恭子の父親への憎悪と、緒方純の父親(緒方耕三・現職警察官)への憎悪とが共鳴して、天下を揺るがす大事件を引き起こしたのであった。盗んだ3億円は、真山恭子が在籍する武蔵学院大学演劇部の舞台裏に隠された。

事件の6日後に緒方純は青酸カリを服毒して死亡した。それ以上に、現役の東北管区警察局長の娘が犯人一味だと臆げに分かり出したことで、捜査本部は警察という組織を防衛するため犯人検挙に踏み切れなかった。

緒方純亡き後、吉岡健一が立川グループのヘッドになった。吉岡はグループ全員と現金3億円を積んだ車を奥多摩に走らせる。その山奥で3億円を焼却した。と同時にグループ各員はその後34年間、互いに会うことをやめた。

三億円事件の捜査本部に若手として加わっていた滝口政利は、34年後の今となって事件の暗部に踏み込も

うとした。その結果、葛木勝殺人事件の捜査本部から解任される。

生活苦にあった葛木勝は、過去の三億円事件の手記を発表して一攫千金を狙った。それを知った結城稔が、口封じのため葛木勝を殺害したのである。しかしこの事件を契機に、結城稔、金子彰、真山恭子は次々に第三者によって射殺されることになる。その第三者とは、三億円事件の現金輸送車助手席に乗っていた（と本作品では創作されている）警備会社ガードマンの息子・宮本翔大であった。三億円事件未解決によって世間から白眼視された翔大の父は首吊り自殺をした。その自殺現場を目撃してしまった幼少の宮本翔大は、その怨念をはらすべく、フリーの記者となり三億円事件を調査し続けていた。

片桐慎次郎の懐に飛び込んだ宮本翔大は、滝口政利に近づき、犯人グループの素性を聞き出した。そして一人一人と射殺していったのである。しかしその宮本翔大も、最後に緒方耕三と格闘のすえ二人もろとも隅田川の濁流に飲み込まれていった。

残された吉岡健一も警察の勾留所で首吊り自殺を遂げた。事件に関係した者は全員この世から去り、三億円事件は再び闇の中に消えるのであった。（以上、永瀬（2003）の要約。）

基本テーマは、子の親への憎悪である。それを際立たせるために、永瀬隼介は、真山恭子とその父親（警察庁キャリア）という登場人物を創造した。しかし、その創作の土台となっているのは、少年 S とその父親（警察官）という実在の親子である。少年 S は緒方純、その父親は緒方耕三となり、小説の骨格を形成している。しかしそれとパラレルな関係となる真山恭子の父親については、34年後の現在には既に亡くなっている設定だ。この（元）警察庁キャリアについて本小説ではほとんど語られていない。それがかえって、警察組織という巨大な闇の深さ・不気味さを仄めかしている。

3-11 再度の犯罪——横山英夫著（2005）『ルパンの消息』——

三億円事件の犯人・内海一矢は、警察の任意同行による取り調べを受けながらも、証拠不十分で逮捕状が執行されることなく時効を向かえた。その日、内海は別に殺人事件を犯す。ぎりぎりのところで時効となった快感を再度体験するためだった。しかし、その15年後の時効直前に、今度こそ殺人容疑で逮捕されてしまう。（以上、横山（2005）の要約。）

三億円事件の犯人が、警察からの追及のスリリングさに酔ってしまうという、斬新な切り口のストーリーになっている。時を経ることで、三億円事件の相対化が許され、愉快犯的な位置づけを与えるという更新に成功している。

3-12 四十年後の犯人の独白——清原一郎著（2009）『小説 三億円事件』——

三億円事件の犯人である「私（一郎）」が、事件後40年を経て、老い先短くなったこともあり、独白するという形式の文章である。当時「私」は某大手総合電機メーカーに勤める電気技師で、川崎市登戸に住んでいた。三億円事件は「私」の単独犯であると言う。（以上、清原（2009）の要約。）

書名を『小説 三億円事件』と銘打っているにも関わらず、三億円事件の顛末はほとんど書かれていない。身内の散漫な雑記ばかりで、小説の体を成していない。

4 まとめ——エディプス・コンプレックスによる穴埋め——

三億円事件はフィクションの中で、時代時代の影響を受けて変容し続ける。昭和40年代に書かれたフィクションでは、三億円事件の背景として、米軍基地や金権政治・政治腐敗といった〈政治性〉を滲ませていた。それに対して、昭和50年代以降に書かれたフィクションでは、共犯者の愛憎といった〈人間関係〉が基調となっていく。

また次のようなことも言える。現実の捜査主任・平塚八兵衛は、三億円事件について単独犯説を強く主張し、平塚着任後の捜査本部の基本方針も単独犯説の方向へ向かった。しかし、フィクションである小説においては、複数犯を設定している作品が圧倒的に多い。なぜ複数犯なのか。それは、単独犯とするよりも複数犯としたほう

が、ストーリーに膨らみや深みが付けやすくなるからである。複数の人物それぞれの思惑が絡み合うところに、人間模様としての小説の旨味が生じる。小説においては自ずと複数犯が選択されるというわけである。

ところで、小説では様々な犯人像が創作されたが、その中で一番多いのは、クロに近いと目されていたものの、三億円事件の6日後に青酸カリで服毒自殺を遂げた少年Sをモデルとした作品群である。松本清張(1975)が嚆矢となり、その後、小林久三(1981)によって、少年Sとその父親の、事件後6日間に焦点を絞った小説が上梓された。さらに三億円事件を題材とした作品の中でも傑作長編小説と評される永瀬隼介(2003)においても、少年Sをモデルとした人物が実行犯役になっている。

現実の少年Sは、不良集団「立川グループ」の幹部であり、補導歴も多かった。そうした少年Sと、現職の白バイ警官である厳格な父という関係は次のように解釈できる。つまりエディプス・コンプレックスを十分に克服できないまま成長してしまった少年の末路の表象である。

フロイトが提唱したエディプス・コンプレックスについては、学問的議論は措いても「人類普遍のコンプレックス」(妙木(2002) p.47)として巷間に知られている。三億円事件のストーリーの欠落した部分を、このエディプス・コンプレックスを孕んだピースで穴埋めすることは、至極自然なことだったと言えよう。

【参考文献】

- 生島治郎(1971)「三億円は死んだ」(中島河太郎編(1975)『小説推理 三億円事件』グリーンアロー出版社、pp.93-130)
- 一橋文哉(1999)『三億円事件』新潮社
- 祝康成(2001)『真相はこれだ!——不可思議8大事件の核心を撃つ』新潮社
- 清原一郎(2009)『小説 三億円事件』文芸社
- 小林久三(1981)『父と子の炎』角川書店
- 佐野洋(1970)『小説 三億円事件』講談社
- 清水一行(1979)『時効成立:全完結』角川書店
- 城真琴(2000)『幻想の手記 褐色のブルース』文園社
- 新都達也(1987)『死者よ静かに眠れ:府中三億円強奪事件』三交社
- 豊田行二(1972)『消えた三億円』三一書房
- 千野帽子(2017)『人はなぜ物語を求めるのか』筑摩書房
- 永瀬隼介(2003)『閃光』角川書店
- 中島河太郎編(1975)『小説推理 三億円事件』グリーンアロー出版社
- 中原みすず(2002)『初恋』リトル・モア
- 平塚八兵衛(1975)『三億円強奪事件』勁文社
- フロイト・S著、中山元編訳(1997)『エロス論集』筑摩書房
- 別冊宝島編集部(2008)『20世紀最大の謎 三億円事件』宝島社
- 松田末雄(2012)『三億円事件の真実』文芸社
- 松本清張(1975)「小説 三億円事件「米国保険会社内調査報告書」」(松本清張(1978)『水の肌』新潮社、pp.121-169)
- 妙木浩之(2002)『エディプス・コンプレックス論争』講談社
- 三好徹(1976)『ふたりの真犯人 三億円の謎』光文社
- 三好徹(1980)『三億円事件の謎』文藝春秋
- むらさけい(2005)『真相究明ガイドブック 雨の追憶 凶説 三億円事件』文芸社
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社
- 横山英夫(2005)『ルパンの消息』光文社
- 読売新聞社会部編(1975)『大捜査・三億円事件』読売新聞社